

## テモテ第一4章6-16節 「教える務め」

### 1A 霊的な鍛錬 6-10

1B 自分の養い 6

2B 命の約束 7-10

### 2A 聖書の教え 11-16

1B 信者の模範 11-12

2B 専念すべきこと 13-16

## 本文

テモテへの手紙第一4章を開いてください。4章6節からですが、私たちの学びは、教会における奉仕者の心得、あるいはガイドブックのような手紙を学んでいます。若い牧者、テモテにパウロがいろいろな手ほどきをします。

前回の学びでは、教会というのは神の家であり、真理の柱であり土台であるとパウロは述べました。その真理とは、敬虔の奥義とも呼ばれており、キリストご自身の生涯そのものに尽きます。敬虔になるために、私たちはどのようにすればよいかを考えます。「こんなことをすれば、もっと霊的になるのではないか？」と思うのですが、結局のところ、キリストご自身を見つめる、その恵みを知ること。そして、この方に倣っていく以外に、他の方法はないのです。

けれども終わりの日には、悪霊の教えがはびこり、それに心を奪われるようになってしまうことを話しています。それは敬虔な装いをしているのですが、肉や肉の欲望に対して何らききめのない律法主義であります。結婚することを禁じたり、ある食物を断つような肉体への修行を教えているものでした。しかしパウロは、信仰と真理によってこそ、あるいは祈りと御言葉によってこそ人は清められるのであって、これらの食物は神に感謝を捧げて食べればよいのだと勧めています。

私たちの周りには、このような違った教えがはびこっています。そして、教会の中にさえそれらの教えを持ち込もうとする人々も出てきます。私たちが、これらの教えからどのように守られ、救われることができるのか？それを4章の後半部分で見えていくことができます。そして、私たちの教会生活に、いかに「健全な教え」というものが大きな部分を占めているのかを知ることができます。

### 1A 霊的な鍛錬 6-10

1B 自分の養い 6

6 これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたはキリスト・イエスのりっぱな奉仕者になります。信仰のことばと、あなたが従って来た良い教えのことばとによって養われているからです。

パウロのテモテに対する勧めは、「教えなさい」ということです。教えるというのは、指導するという意味合いがある言葉です。これこそが、キリスト・イエスの立派な奉仕者になることのできる道だということです。主が弟子たちに、よい忠実なしもべ、思慮深いしもべのことについて教えられましたが、これこそがキリスト者として、主に仕える者として最も願っていることですね。主人であるイエスご自身から、「よくやった、忠実なしもべだ」とみなされたい、と願っている。主を喜ばせたいと願っている、そうした願望は、しっかりと兄弟たちを教えることによって成し遂げられます。

そして呼び名にも注目したいです。「兄弟たち」とパウロは使っています。日本の教会では、「信徒たち」がいて、そして牧師が「先生」となっていて、徒弟制度のような意味合いの呼び名が多いのですが、私はパウロと同じように、いつまでも皆さんのことを、兄弟であり姉妹であると思いたいです。同じところに立っている者であり、神の家族であり、その中でたまたま牧者の賜物を神から授かっているに過ぎません。そして、「奉仕者」と訳されている呼び名ですが、これはディアコノス、仕え人と訳したほうがよいでしょう。執事とも訳すことのできる言葉です。したがって、執事と呼ばれている人のみが仕える働きをするのではなく、徹底的に自分は仕えているのだ、人々の下につくのだという姿勢が私に必要です。

そして、その奉仕は何によって支えられているかと言いますと、まず「信仰のことば」です。信仰の言葉とは、イエス・キリストの真理について、信じることによって発せられる言葉です。これは能動的な行為です。単に教条や信条として持っているのではなく、自分を支え、自分の命、救いとなっている存在として、告白していく行為であります。例えば、教団の信条にキリストの再臨について書いてあるのと、日頃の生活の戦いの中で、「主が間もなく来られます」と信仰を働かせるのでは、大きな違いですね。

この信仰の言葉があり、そして「あなたが従って来た良い教えのことば」に養われている、とあります。これには、二重の意味があります。テモテは、幼少の頃から母と祖母に聖書の教えを受けていました(2テモテ 1:5)。信仰を持つ前のユダヤ教徒としての教えかもしれません、しかし、それがパウロが来て福音を聞いた時に信じることのできる素地を作っていたのでしょう。そして、今度はパウロから、しっかりと聞いていました。それは言葉による教えのみならず、彼の生き方そのものからも学んでいました。「2テモテ 3:10-11 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。」と第二の手紙で話しています。教えはもちろんのこと、その行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐、そして迫害までも、テモテはパウロに付いてきたのです。

このことから分かることは、私たちの教会の営み、また福音宣教の営みには、「模範」ということばがいかに大事かということです。一人の聖徒が、他の信仰の新しい人に与える影響というのは、とても大きいのだということです。教えることができること、そして行動に見せる、愛していく、そうしたことを全て含めて、相手に伝えていくことによって成り立っています。

そしてテモテは、じっくりと養われました。この自分自身への養いこそが、彼が他の兄弟たちを教えることのできる土台を作っているということです。自らへの養いは、時におこがましいと思うかもしれません。他にいろいろしなければいけないことがあるのに、それで立ち止まって、自分が養われることに費やしていいのだろうか？とってしまうわけです。けれども、そんなことは決してありません。教会はクリスチャン製造機ではありません。教会は、神が命を与える有機体です。したがって、私たちに栄養が与えられることによって、かえって他の人々に仕えることのできる体であります。

## 2B 命の約束 7-10

- 7 俗悪な、年寄り女がするような空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛練しなさい。  
8 肉体の鍛練もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。

パウロは、まことしやかに教えている、例えば食物を禁じるような教え、結婚を断つような教えは、「俗悪な、年寄り女がするような空想話」として退けています。1章4節には、「果てしない空想話と系図」という言葉が出てきました。こういうものは避けなさいと強く命じています。しかし、「敬虔のために自分を鍛練しなさい。」と教えています。ここが大事ですね。なぜか、私たちは敬虔のための健全な教えはないがしろにして、知らなくてもよいような事柄に多くの時間を割きます。それはちょうど、栄養の全くない物をずっと食べていて、栄養のバランスのある食物には興味がないのに似ています。悪いものから守られるのは、悪いものがいかに悪いかを知ることよりも、むしろ健全な教えによって自分を整えることに他なりません。

ここで「鍛練する」という言葉が使われていますが、これはスポーツ選手に使われている言葉です。パウロは、競技をする人々を喩えにしてしばしば、霊的生活を説明しています(ピリピ3:14等)。私たちが霊的に養われ、成長する過程というのは、ちょうど運動選手が肉体の鍛練をするようなものであることを表現しています。この前の恵比寿バイブルスタディの中で、とても良い話し合いがありました。日本という国、ことに東京に生きてると、自分の生活が経済活動、すなわち仕事などに追われて、それで考えることができなくなり、考えても自分のことしか考えられなくなっていく。自分を失ってしまう、という内容が出てきました。一人の方が、「意識して努力しないと」という言葉を言っていました。まさにそこです。意識的な努力が霊的な進歩に必要であります。

そして、「肉体の鍛練もいくらかは有益」とありますね。これは、全くその通りです。主は私たちにご自分の聖霊を住まわせる肉体を与えてくださいました。肉体の鍛練は役立つでしょう。しかし、それは飽くまでも、「いくらか」であります。世においては、健康食品や健康管理などで思いをいっぱいにするような話ばかりがありますが、それは不信者の中での話だからよいでしょう。しかし、肉体の修練があたかも人を敬虔にさせるような教えが、先ほどの食物を断つであるとか、結婚を禁じる

ような教えなのです。

しかし、霊的な鍛錬は違います。霊的な鍛錬は、全てののことに有益です、そして「今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔」であります。今の命とは、今、私たちが生きている時に与えられる敬虔であります。神のように生きることです。この世において、私たちはイエス様に付いていくことに報いがあります。「イエスは彼らに言われた。「ルカ 18:29-30 まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」私たちの内にある心の平安、喜び、愛、破壊された関係の修復など、報いは計り知れないものがあります。しかし、その鍛錬はこの世だけでなく、未来の命をも約束されたものです。今だけでなく、将来の報いに直接に結びついています。

9 このことばは、真実であり、そのまま受け入れるに値することばです。

パウロは何度となく、この手紙の中で同じ言い回しを使っています。1章15節には、キリスト・イエスが罪人を救うために来られたという言葉は、まことであり、そのまま受け入れるに値するとあります。これはいわば、諸教会の信条にしてよい言葉だということです。エペソにある教会で、いろいろな論争をしかけてくる者たち、違った教えをする者たちがいる中で、その嵐の中に、「この言葉だけは死守します。」ということのできるものでした。

10 私たちはそのために労し、また苦心しているのです。それは、すべての人々、ことに信じる人々の救い主である、生ける神に望みを置いているからです。

霊的な運動選手として、パウロたちも労して、苦心しています。私たちもそうですね、教会を通して主に仕える者たちとして、何をもってまだ信じない人々に近づけばよいのか、また、信仰の若い人々に助けることができるのか、あるいは、反抗している人をどのようにして戒めるのか、いろいろ労し、苦心します。一人の選手をどのようにして鍛えるのか、コーチとしては苦心します。またスポーツ選手自身も、自分の記録を達成するために労して、苦心します。

そして、パウロがこの手紙で強調しているもう一つのことは、神は救い主であるということです。「すべての人々、ことに信じる人々の救い主である、生ける神」と言っています。すべての人々の救い主であることについては、2章4節で「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」とあります。これだけ、主は心の広い方です。誰かを見捨てて、一部の者だけを救うという方ではありません。これをパウロは、「信仰による神の救いのご計画(1:4)」と呼んでおり、私たちが清い心と、正しい良心と、偽りのない信仰から出てくる愛によって求めていけないといけないものなのです。

私たちのところに神が出会わせてくださる人々に、神の救いを必要としていない人は誰一人いません。そして、その人々はあらゆる人たちがいます。その度に私たちは、苦心します。心をどこまで広げればよいのだろうか、と思います。その人々の通っている苦しみや試みにも、耳をすまさないといけません。富んでいる人もいれば貧しい人もいます。日本人だけでなく、外国の方もいます。社会的には少数派の人もいるでしょう、同性愛の人とかもいます。また他宗教の人もいます。私たちはすべてのことを知る必要はありませんが、すべての人を神が救おうとされていることを知る必要があります。

そして、「ことに信じる人々の救い主」と言っています。全ての人を神は救いたいと願われているし、キリストの十字架は全ての人を救う力があります。しかし、信じる者だけにその救いが有効となります。高性能な、強力な洗濯機が無料で東京都民全てに配られたとしても、その洗濯機を実際に使用する人、それで汚れやシミが取れたという人が一部であるように、救いも信じて受け入れた者だけが自分の者とすることができます。

そして、この方は「生ける神」であり、この方に「望み」をかけています。私たちは、他の何物にも期待あるいは望みをかけることはできません。主なる神以外のことや人については、主にあって、主の御心であれば期待することができ、望むことができます。しかし、望みは主のみにかけます。

## **2A 聖書の教え 11-16**

### **1B 信者の模範 11-12**

11 これらのことを命じ、また教えなさい。12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。

パウロは、しっかりと教えること、さらに「命じる」ことを教えています。テモテにとって、これはとても勇気の要ることでした。彼は元々、内向的な人、気の弱い人であったことが伺えます。「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。(2テモテ 1:7)」と第二の手紙で話しています。また、彼は胃の病気も患っていました(1テモテ 5:23)。もしかしたら、牧会のストレスから来ていたのかもしれませんが。

そして、テモテが「年が若い」と言っています。注解書を読むと、40歳まで至っていないということではないか、という意見が多かったです。30歳ぐらいだったのかもしれない、そしてパウロは70歳ぐらいだったであろうか、という意見もありました。年が若いということでの不利益は、実ほどの文化にもあります。私個人は、今のほうがはるかに20代の時より生き生きと主の働きができています。まず、何をしているのか分からなかったという思いがありましたが、「あなたはまだ若いから」という理由で、教えるべきこと、指導すべきことを聞き入れてもらえないことが多かったからです。確かに若気の至りがあったと思います。今もたっぷりありますが！けれども、20年を経て、やはりもっと多くの世代の人々に、あまり年のことを言われずに働きかけることが可能になりました。



しかしテモテにとっては、それが不利益でした。エペソにある教会には、もっと年上の人々がたくさんいたのでしょう。そして違った教えをしている者たちを戒めても、そこで「あなた、若いねえ」ということを言われてしまう、という悩みです。

そこで、パウロは先ほどと同じように、「問題をなくそうとするのではなくて、積極面に専念したほうがよい。」ということでもあります。それが、「信者の模範になりなさい」という勧めです。「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」とっています。指導者として、どのようにキリストに従っていけばよいのか、それを示していくことによって付いて来てもらう、ということです。そして、牧者は公の場で最も目立つのが「ことば」です。多くの言葉を語るのも、言葉において何を語ればよいのか、それを示していくことができます。恵みの言葉、塩気のある言葉です。そして、「態度」とあります。これは「行動」とも訳せる言葉です。自分の行ない、またそこに現れている姿勢と言ってよいでしょう。そして残りの三つは、心の中にあることで動機です。「愛」があります。動機と言えども、それは人に伝わるものです。同じ言葉を話していても、その人が愛しているのか、そうでないかは、どんなに話す技法を身に付けていても自ずと分かります。それから、「信仰」ですね。その人の生活から何を信じているのかが分かります。そして、「純潔」です。テモテに対して、第二の手紙で情欲を避けなさいという勧めをします。性的な純潔、また思いにおける純潔、情欲のみならず、悪意などによる汚れからも離れていること、こうしたことは先ほど話したように、霊的な鍛錬が必要です。

## 2B 専念すべきこと 13-16

13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。

前にも話しましたように、テモテへの第一の手紙は、パウロがエペソにいるテモテのところに行こうとしているけれども、そこでテモテに教えようと思ったけれども、けれどもその前に早く手紙で伝えておくというものです。それで、「私が行くまで」とっています。

ここに、パウロが行く時までに限らず、初代教会が行なっていたこと、また教会として行なうべきことが書かれています。「聖書の朗読と勧めと教え」であります。朗読とありますが、初代教会は特にこれが必要でした。印刷技術はずっとずっと後に出てきたものですから、長老が写本を、その巻き物を開いて聖徒たちに読ませていたというのが当時の姿でありました。しかし、それだけでなく、口にして、声に出して読み、それを会衆が聞いて、「アーメン」と言っていくということはとても必要です。前回の日曜日の交わりで、「どうしても、聞いていることと、行なっていることがちぐはぐになってしまう。」という悩みをある方が分かち合っておられました。そうですね、それは私たち全員の悩みです。私たちは、聞いたことを頭で整理することも大事ですが、それ以上に、それを、信仰をもって心に受けとめる、祈っていく、体をもって反応していくことが必要でしょう。

そして「勧め」です。勧めは、書かれていることを行なうように促す力を持つ、言葉であります。

ヤコブの手紙は、その賜物がフルに使われています。フランクリン・グラハムによる福音宣教を思い出せるでしょうか、彼は伝道者であります、数多くの勧めを行ないました。悔い改めて、主イエスを信じなさいという言葉は彼は言って、それに従う人々がステージの前に降りて行きました。知っていることを行動に移すことのできる言葉です。私自身も、この賜物を求めて、またこの命令に従わないといけな、と感じています。

そして「教え」であります。教えは、知識を与えることです。これは説明をあまりしなくてよいでしょう、たった今、そのことを行なっているからです。

この三つを、旧約時代は、例えば学者エズラが行なっていました(ネヘミヤ記 8:5-8)。そしてユダヤ教の会堂、シナゴグで行われていました。イエス様がナザレでイザヤ書を渡されて朗読されたのを覚えていますか？その形式を教会も踏襲していました。そしてこれらのことに、「専念しなさい」とテモテに教えています。専念するということは、しっかりと前準備をするということも含まれます。他にもいろいろしなければいけないことがあるかもしれないけれども、聖書を朗読し、勧め、そして教えることについてはかなり高い優先事項として行なっていきなさいということです。

14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。15 これらの務めに心を砕き、しっかりやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。

テモテには、聖霊の賜物が与えられていました。それが牧会に関わるもので、教える賜物、勧める賜物、また治める賜物もあったことでしょう。それらが与えられていたけれども、いろいろな困難や圧迫を受けている中で用いないようになっていく傾向がテモテにはあったということです。それをパウロは、「軽んじてはいけない、この務めに心を砕いて、しっかりとやっけていきなさい。」と励ましています。

「長老たちによる按手」とありますが、この時にパウロがいたことは間違いありません。テモテへの第二の手紙でパウロが按手していたことが書かれています(1:6)。そこにも、「あなたのうちに与えられた神の賜物を再び燃え立たせてください。」とあります。教会における務めに任じる時に、このようにして手を置く、すなわち按手をしていた習慣が教会にありました。パウロとバルナバ自身も、アンテオケの教会で、宣教の任務につかせなさいという預言の言葉が与えられ、指導者たちに手を置かれてから遣わされたことが書かれています(使徒 13:1-3)。旧約時代では、祭司が家畜に手を置いて、それから屠りましたが、それは罪がその家畜に置かれるためでした。自分の罪がその対象に移ることを意味し、一体になることを意味しています。宣教師たちに手を置くのは、彼らが神に任命を受けたけれども、私たちも彼らと一つになって宣教の働きをしますという意味を含んでいます。

そして、誰でも彼でも手を置けばよいというものではなく、「だれにでも、軽々しく按手をしてはいけません。(1テモテ 5:22)」とパウロはテモテに指導しています。本人が確かに主からの任命を受けていると認めることのできる人だけに按手します。

それから預言によって、聖霊の賜物が与えられたとパウロが行っていますが、パウロ自身、アントオケの教会において、誰かの預言の言葉によって、宣教の働きへと遣わされたのですが、同じようにテモテも、パウロや他の長老たちの按手の中で、祈りの中で、誰かが預言を行なったのでしよう。その時に確かに、彼に牧会や福音宣教の賜物が与えられていることを知ったのだと思います。私たちカルバリー・チャペルでは、「アフターグロー」という聖霊の働きを待つ集会を行ないませんが、そこでは癒し、罪の赦し、聖霊のバプテスマなどを求め、また預言の言葉も待ち望みます。そこに、これから宣教や福音伝道への働きへ誰かが促されるということもあるのではないかと、思いました。

しかしテモテは、そのことに自信が持てていませんでした。そこで、しっかりやりなさい、とパウロが励ましています。主から与えられた賜物は、与えられても持ちなければ、御霊の火を消してしまうこととなります。しっかりと用いていく必要があります。

そうすれば、「あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。」と言っています。これは軍事的な用語だそうです。進軍していくということを意味します。あるいは部隊の長が前に進むことによって、他の兵士たちが彼に付いていくことができるようになるという意味を持ちます。主によって励まされて、信者の模範になっていくこと、そして聖書の朗読、勧め、教えに専念すること、聖霊の賜物をきちんと燃え立たせること、これらを行なえば、他の信者たちがあなたに付いていくことができるようになるよ、と励ましているのです。指導者や奉仕者は、自分自身が進んだところまでしか、人々を連れて行くことはできません。モーセがホレブの山で燃える火を見ましたが、彼がイスラエル人を連れてきたのは、ホレブの山でありました。自分自身が主のところに行く、そのところまで人々を連れて行くことができるのです。

16 自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うこととなります。

前進していくなかで、同時に気をつける必要があります。二つのことに気をつけます。「自分自身」、そして「教える事」です。自分自身が、主の愛から離れていることはないか？純潔から離れてはいないか、つねに自分を調べる必要があります。そして、教えていることに違ったものを混ぜていないかを気をつけます。それを続けなさいとパウロは勧めます。忠実であること、勤勉であること、忍耐すること、これらが立派な奉仕者の条件です。そうすれば、荒波のようにになっている信仰の戦い、霊の戦いの現場で自分を救うことになるし、聞いている人たちを救うこととなります。